

巻頭言

〈小特集〉「暴力からの人間存在の回復」研究会ワークショップ 芸術哲学の可能性 —シェリング・ホワイトヘッド・メルロ＝ポンティ

本特集は2017年3月5日、立命館大学衣笠キャンパスで行われた、立命館大学人文科学研究所重点研究プロジェクト「間文化現象学と人間性の回復」の「暴力からの人間存在の回復」研究会主催若手ワークショップ「芸術哲学の可能性」で発表された論考によって構成されている。このワークショップのコーディネーターを務めた有村直輝氏（立命館大学文学研究科博士後期課程）に感謝したい。

本ワークショップでは、哲学と芸術の接点をめぐって、佐野泰之氏（京都大学）、加藤紫苑氏（京都大学）、有村直輝氏が発表を行い、それぞれの論点から、哲学から芸術へのアプローチのなかで、哲学がその可能性をどのように拡大することができるのかが論じられた。

佐野氏は、20世紀半ばにフランスで活躍したメルロ＝ポンティによるポール・ヴァレリーの読解の形跡を丹念に追い、そのことを通じて、メルロ＝ポンティの哲学における文学の意義を明らかにされた。ヴァレリーの「声」や「錯綜体」(implexe) という概念についてのメルロ＝ポンティの解釈を通じて、言語と身体、言語と存在の問題が「形而上学」と呼ばれうる内容を秘めていることを示された。

加藤氏は、18世紀末から19世紀なかばにかけて活躍したドイツ観念論の哲学者フリードリヒ・シェリングの「芸術哲学」を基本に置きつつ、リュディガー・ブプナーの『美的経験』やアラン・バディウの『哲学宣言』、また小田部胤久の『西洋美学史』について言及され、芸術に真理の場を見るシェリングに対して、芸術と哲学の批判的距離を保とうとする試みを紹介さ

れた。そして真理問題をめぐる芸術と哲学の関係について中立的な立場から歴史的考察を行うことの必要性を主張された。

有村氏は20世紀前半の哲学者ホワイトヘッドの「芸術」概念を論じられ、ホワイトヘッドにおいて美の経験と真理との関係が人間精神の「治癒機能」を持つものとして考えられていることを明らかにされた。芸術の陶酔による麻痺や混乱といった「精神病理的」機能に対して、真の宇宙の調和を私たちに感じさせる芸術の経験は、自身の経験を新しく創造する経験でもあることを論じられた。

これらの研究を通じて、哲学が芸術に真理の実現の機能を認め、芸術を通じて哲学の役割を実現・拡張していくことの可能性と同時に、哲学と芸術との批判的で適正な距離のあり方についての問いもまた明らかになったように思われる。哲学と芸術という、人文学において人間精神の最高峰を極めるような領域が、それぞれに交差しながら、その領域の境界について思索することをうながしていることが示されたと言えよう。

2017年度にはもうひとつのワークショップ「実存思想の可能性」も行われた(2017年10月13日)。このように、若手研究者の主催による充実した研究ワークショップが連続的に開催されていることは、本学における若手研究の活性化として本研究会の大きな成果であると言える。

文学部教授
加國 尚志